

---

# 楽園の薔薇

柚葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

楽園の薔薇

### 【Nコード】

N4969Z

### 【作者名】

柚葉

### 【あらすじ】

どこかの扉で繋がっている楽園。

その世界には闇を照らすために『薔薇』と呼ばれる人がいる。

でも、今回の『薔薇』はやる気なし!?

2人の護衛を連れて、いやでも仕事に行く。

そんな『薔薇』でも大丈夫…?

楽園の闇を照らす『薔薇』たちの、神秘的(?)な物語。

\*これは別サイトで私が「ふーちゃん」として書いている小説です。  
盗作なんてことはないです。

## プロローグ

### 楽園の薔薇

#### <プロローグ>

ある日。

僕は不思議な人を見た。

水色の目。

それに明るい茶色の髪。

その女の人は、野原で何かを唱え、扉を作った。  
そして、その扉の中に入っていく。

扉の中はまぶしい光であふれていた。

そんなことが何日も続き、がまんしていた僕も思いきって話しかけた。

「その扉は何？」

と。

そうすると、その人は僕をびつくりした目で見つめた。

「あなた…、これが見えるのね！」

と喜びながら言う。

「あなたも、来る？ 楽園に。」

そう言って、僕の手を取ると、扉の中へ入った。

目を開けると、そこは自然が広がるきれいな場所。

「来てくれてありがとう。あなたには、この子を頼みたいの。」

「この子…？」

考えて、気付いた。

この子というのは、女の人のお腹にいる赤ちゃんのことだ。

「そこで、あなたに、今日生まれてもらうわ。」

その最後を聞くか聞かないかの時、僕の意識はとぎれた。

\* \* \* \*

「ソフィア」

その声に気付き、私は振り返る。

「ユニゾン」

「もう、終わったか？」

「ええ。今生まれたはずよ。」

その通り、建物にはどよめきがあった。

「あの子には、イスフィールの許婚になってもらった。」

まだ生まれていないイスフィールをなでながら、私は目を閉じた。

「だからね、ユニゾン。あなたと、さっきの子…そうね、セイレーンにしましょう。その2人が中心になってイスフィールを守ってやって。この子は、この楽園にあるたった1つの薔薇なんだから。」

私の言葉に、ユニゾンは静かにうなずいた。

「たぶんイスフィールは元気な子になるだろうから、そのうち、もう1人あげる。…任せたわよ、セイレーン、ユニゾン。…イスフィール、あなたは、この世界の闇を出来るだけでいいから照らして。」  
そして誰にもなくつぶやく。  
「よろしくね」と。

## 1・二分咲きの薔薇？

### 楽園の薔薇

#### 1・二分咲きの薔薇

< 1 >

「……。朝……？」

少女は寝台の上で首を傾げた。

「今日の天気は……。」

少し右にずれ、天井に着いている窓を見上げる。

ややあつて、嫌そうにつぶやいた。

「……晴れえ……？」

実は晴れの日が大のきらい。

「雨でも降ってくれりゃいいものの……。明日は逆さのてるてる坊主でもやろうかな。」

そういいながら、机の上のペンダントを手に取った。

これは、ルビーの粉で作られた、真っ赤な薔薇の形をしている。

この楽園にたった1つのものだ。

その時、ドタドタツと、外でものすごい音がした。

少女は慣れているようにため息をつく。

そして、首にかけたペンダントを握りしめた。

これは、『薔薇』と呼ばれる者たちの特別な能力だ。

握りしめると同時に、少女の身体から、淡いピンク色のオーラが立ち上った。

しかし、少女は何かを思いついたようにペンダントから手を離す。

「やっぱ、無視した方が良いのか？」

と、つぶやいた。

その時、部屋についている最高級の扉がものすごい音を立てて開かれた。

「僕の薔薇姫！元気だったかい！？」

薔薇姫と呼ばれた少女は、額に青筋を浮かばせる。

扉を開けたのは、そこにいた少年だろう。

「セイレーン…。元気だった？ですってえ？昨日も来ていたじゃないの！」

少女は無視すると決め込んだはずなのに、耐えきれず文句を言う。

少年　セイレーンは、満面の笑みを浮かべた。

「やだなあ、薔薇姫。一日で熱が出るかもしれないんだよ？」

「うるさい。私は年中ずーっと元気です！」

少女の頭の中で、何かが切れる、ぶちっという音。

「だからあんたは…薔薇姫って呼ぶなって言ってるでしょ…！」

少女　イスフィールは大声で叫んだ。

\* \* \* \* \*

エプスタイン家。

それは、この楽園にある珍しい一族だ。

その家で生まれる姫は、たった1つの薔薇のペンダントを身につけることが出来る。

身につけた者は『薔薇』と呼ばれ、楽園の闇　悪いことを封じなければならぬ。

そして、今回の『薔薇』は。

「あーもうっ！帰ってよ、うっとうしいっ！」

エプスタイン・イスフィール。

「やだっ僕も言ったでしょ。」

イスフィールは、文句を言いつつ廊下を歩いていた。

遠い親戚で、許婚　婚約者のセイレーンと一緒に。

「なんで父様の所に行くのに、あんたもついてくんのよ。」

イスフィールの周りに、どよんとした空気。

「いいんだってば。ユニゾンさんは僕のこと、いてもいいみたいだし。」

話しているうちにユニゾン（父）の部屋についた。

イスフィールは、セイレーンの言葉を無視して扉を開ける。

「父様！入ったから！」

普通は『入るよ』ぐらいなのだ。

けれど、イスフィールは『入ったから』。

「お、来たかイスフィール。セイレーン君も入っていいぞ。」

セイレーンはその言葉を聞き、ほらねと言うように目を細めた。

さっきのイライラが残っているせいか、イスフィールは見ないふりをして席に着いた。

セイレーンも同じように席に着く。      もちろん、イスフィールの隣。

その光景を目にしたユニゾンは、こらえきれずに吹き出した。

そのまま大笑いをする。

そんなユニゾンを、イスフィールはものすごい顔でにらんだ。

「ユニゾン、いいから話を続ける。と言うか、話し始める。」

全然気付いていなかったが、ユニゾンの後ろに人がいた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4969z/>

---

楽園の薔薇

2011年12月16日22時53分発行